

中留 武昭編著, 『カリキュラムマネジメントの定着 過程 : 教育課程行政の裁量とかかわって』

山下, 顕史
九州大学大学院人間環境学府修士課程

<https://doi.org/10.15017/8071>

出版情報 : 教育経営学研究紀要. 9, pp.79-79, 2006-05-31. 九州大学大学院人間環境学府(教育学部門)
教育経営学研究室/教育法制論研究室
バージョン :
権利関係 :

中留 武昭編著

『カリキュラムマネジメントの定着過程—教育課程行政の裁量とかかわって—』

(教育開発研究所、2005年、全343頁)

山下 顕史

本書は、「自律的学校経営が制度的には可能となった経営環境の変化のなかで、実際に教育課程行政の裁量拡大のもとで、各学校がどのように従前からの画一性・硬直性の高かった教育課程経営を超えて、それぞれに特色ある弾力的なカリキュラムマネジメントを実践し、学校を改善していく礎を今日の時点において築きつつあるのかを実証的に明らかにすること」(p. iii)を研究のねらい・刊行の意図とし、教育委員会を対象とした調査や、学校現場における事例分析などを通し、実際の現場(行政・教育)におけるカリキュラムマネジメントの実態の解明を試みた労作である。

まず、第Ⅰ部においては、「教育課程行政の規制緩和への取り組み」を表題とし、都道府県教育委員会、教育事務所、市町村教育委員会を対象に調査を行い、教育課程基準の大綱化・弾力化と関わって、都道府県教育委員会—教育事務所—市町村教育委員会と学校における規制緩和(裁量)の範囲と程度、教育課程基準の大綱化・弾力化に対して、教育行政機関がどのような施策を通して対応しているのか、また、各教育委員会の直轄下の学校に対する指導が、実際に学校の組織要因やカリキュラム要因にどのような影響を及ぼすのかについて明らかにしている。

第Ⅱ部は、「カリキュラムマネジメントを規定する構成要因の解明」と題し、教育委員会の行う、自主性・自律性と大綱化・弾力化とを意識した学校に対する指導(施策)が、当該校における組織要因やカリキュラム要因に対しどのようなインパクトを与えているのか、カリキュラムマネジメントを促進する組織的条件、特に、カリキュラム文化(編著者はカリキュラム文化を「当該校教職員のカリキュラムに対してのごく共通の見方・考え方で、そこから醸し出されてくる「雰囲気」と捉える」(p. 114)としている。)が持つ要因である、順応性・適応性・創造性がカリキュラムマネジメントに与えているインパクトは何か、教育課程基準の大綱化・弾力化に伴う、特色ある学校づくりの一環である総合的な学習の時間のカリキュラムを促進している、組織的・文化的な条件は何かについて、学校へのカリキュラムマネジメント調査(第Ⅱ部においては数量調査)を通して解明している。

第Ⅲ部では、第Ⅱ部での数量調査に加えて行われた事例調査(小学校4校、中学校3校、高等学校3校)についての報告がなされており、調査を通して、総合的な時間のカリキュラムが定着化するための条件と、特色あるカリキュラムマネジメントを促進する条件がどのように形成・維持されるのかを分析している。

終章においては、「研究の全体成果と今後の研究的・実践的な課題」として、本研究の結果を受けて、今後カリキュラムマネジメントをどのように展開し、今後の研究上の課題について記述されている。

本書は、教育経営学研究者だけでなく、学校現場のスクールリーダーにとっても非常に有用な書物と言えるのではないだろうかと考える。ただ一つ、第Ⅲ部における事例分析について、かなり限られた範囲での記述であるように感じられた。終章にも「教育経営学とカリキュラム学とのまさに接点に位置づくカリキュラムマネジメントの研究が、これからの若手・中堅の研究者に意欲的に引き継がれることを期待したい」(p. 337)とあるように、特にカリキュラムマネジメント(教育経営学)と授業実践(カリキュラム学)との関係性の分析についての記述があれば、さらに本書を充実したものとすることができたのではないだろうかと感じ、また、このことを私たちの今後の研究を行う上での課題として受け止めた。